飛耳長目

学校・地域の特質を生かした学校づくり

山口市立井関小学校長　清　水　久美子

修学旅行を終えて息つく間もなく、本校の六年生は、梅雨の合間を縫って梅の収穫をした。今年度着任した井関小学校では、このような学習を、「ふるさと学習」として位置付け、各学年で長い間継続している。

梅を収穫して販売する活動は、いつ頃から始まったのだろうと思い、沿革史や校務日誌を紐解いてみると、昭和四十三年まで遡ることができた。校務日誌に、「梅もぎ、二十一・五升収穫、一升百五十円」の記録を見つけた。

二校時分を使った活動は、約百キログラムの収穫をもたらし、二万円（一キログラム二百円で販売）の収入は児童の教材環境を豊かにする。しかし、これは全体の三分の一か四分の一に過ぎず、まだまだ梅はたわわに実っている。安全面の配慮から、児童には高所の収穫を禁止しているからだ。

それにしても多くの家庭から注文があるものだと感心してスーパーに寄ると、一キログラム千二百円の値札がついていた。見守り隊紹介式の日に、隊員の方が玄関前の築山の梅の木を見て、「今年は実がいっぱいついているねえ。いつ注文をとるんかねえ。」と楽しみにしていらっしゃったが、納得した。

児童とともに梅を収穫しながら、児童に各家庭の梅の活用状況を尋ねると、「注文したよ。おばあちゃんが梅干しを漬けてくれるよ。」「梅ジュースの梅がおいしいよ。」などの回答があり、児童が本気で収穫するわけも見えてきた。

本校ＡＬＴも大きめの梅を購入し、「梅酒に挑戦します。作り方はインターネットで調べれば大丈夫です。梅は、英語でエイジュンプラムと言い、アジアにしかない植物です。」と豊富な知識を披露していた。

約三十本の梅の木が学校・家庭・地域をつないでいることを感じ取り、学校のもつ特質に触れた気がした。昔、夏になると母が作ってくれた梅ジュースを楽しみにしたこと、毎年義母が塩漬けした梅を天日干しにしていたことを思い出し、私も梅干しに挑戦することにした。

学校運営協議会では委員さんが、「井関には、世界各地のマラソン大会に参加しシニア部門で金メダルを取った素晴らしい人がいる。是非地域の人材を活用して子どもたちに夢をもたせてほしい。紹介するよ。」と言ってくださり、これから学校や地域の特質を生かした「おらが学校づくり」をする意欲がわいてきたところである。

文教のまち　大道で

防府市立大道小学校長　山　田　さ　よ

♪松かげに　白砂匂い
山映す　池の面澄んで
うつくしき　大道のむら
四季の花　咲きつぐ丘に

この歌詞は本校の校歌である。これまで数々の学校を経験したが、歌詞の中に校名のない校歌は初めてである。最初は覚えにくい校歌だなと感じていたが、慣れ親しんでくると大道地域の昔から受け継がれたのどかな田園風景、自然を愛し、勤労を尊び、平和を愛する人々の姿が目に浮かんでくる。そしてここに生まれたことに誇りを感じ、ふるさとを担う若者を育成しようとする願いが歌詞の中に脈々と流れている。まさに地域の中の子どもたちを育てていこうとする思いが伝わってくる。

防府市は昨年度、全小中学校がコミュニティ・スクールに指定され、学校が家庭や地域と一体となって子どもの健全育成を図る体制づくりを進めている。大道小学校は平成二十二年度文科省のコミュニティ・スクール推進事業研究指定校となり、先進的に研究を推進してきた。

登下校の安全を見守ってくださる大道子どもみまわりたい、庭や花壇の環境整備をしてくださる花いっぱいボランティア、図書の整備や読み聞かせをしてくださるお話宝箱ボランティア、日々の授業のサポートや大道ならではの伝統芸能・文化を伝承してくださるゲストティーチャーボランティア、さらに、今年一月から開講した放課後学習教室では退職された元教員に算数の宿題や学習プリントの指導をしていただいている。現在、八名のボランティアの先生方が四十名の子どもたちを指導してくださっている。

このように様々な立場で保護者や地域の方々が学校を拠点として関わり、共に子どもたちを育てる体制が充実してきた。

では、これからのコミュニティ・スクールの課題は何だろうか。

それは文教のまち大道で育てたい子ども像（若者像）を幼・保・小・中・高・大学、そして家庭や地域がしっかり話し合い、一貫した目標を共有して共に育てていくことにあると感じている。めざす目標が一貫していれば、それぞれの立場で地域の子どもたちを育てることに責任と誇りをもつことにつながる。そして地域協育ネットの機能がつながっていく。

まちづくりは人づくり。将来の担い手である子どもたちが、ふるさと大道に愛着と誇りを感じる地域の学校づくりに一層やりがいを感じているところである。